

千葉龍卜宗匠著

源氏活花記

東雲堂藏版



此主
示宣院

活花記序

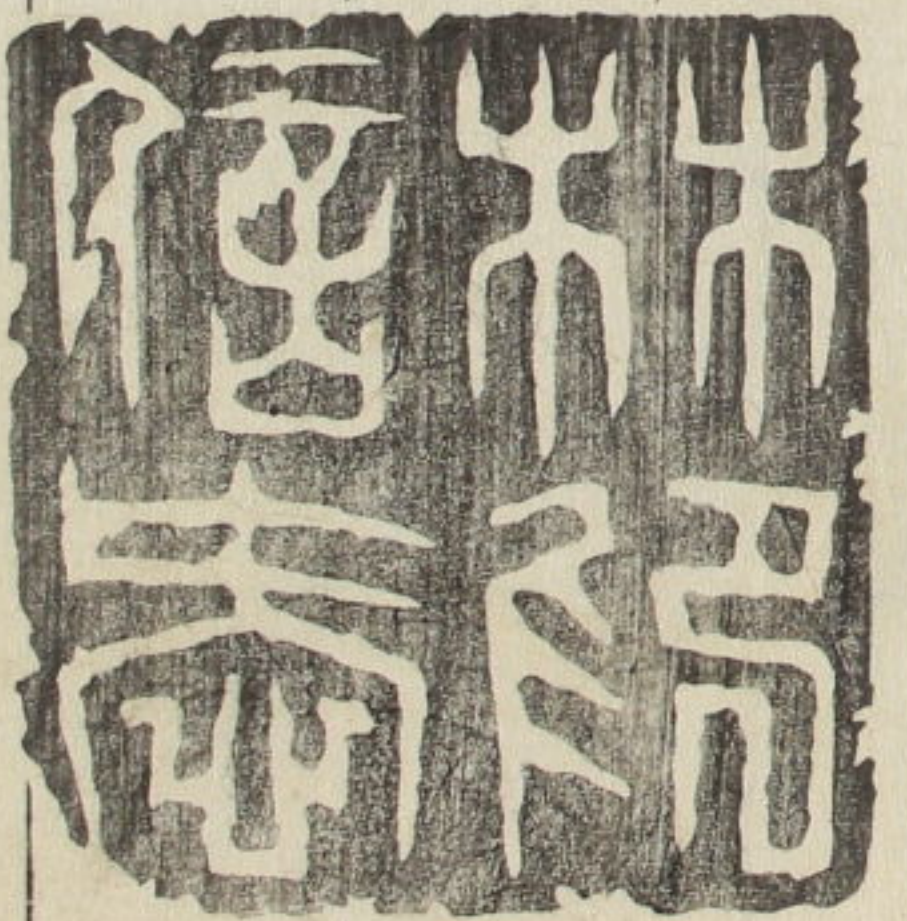
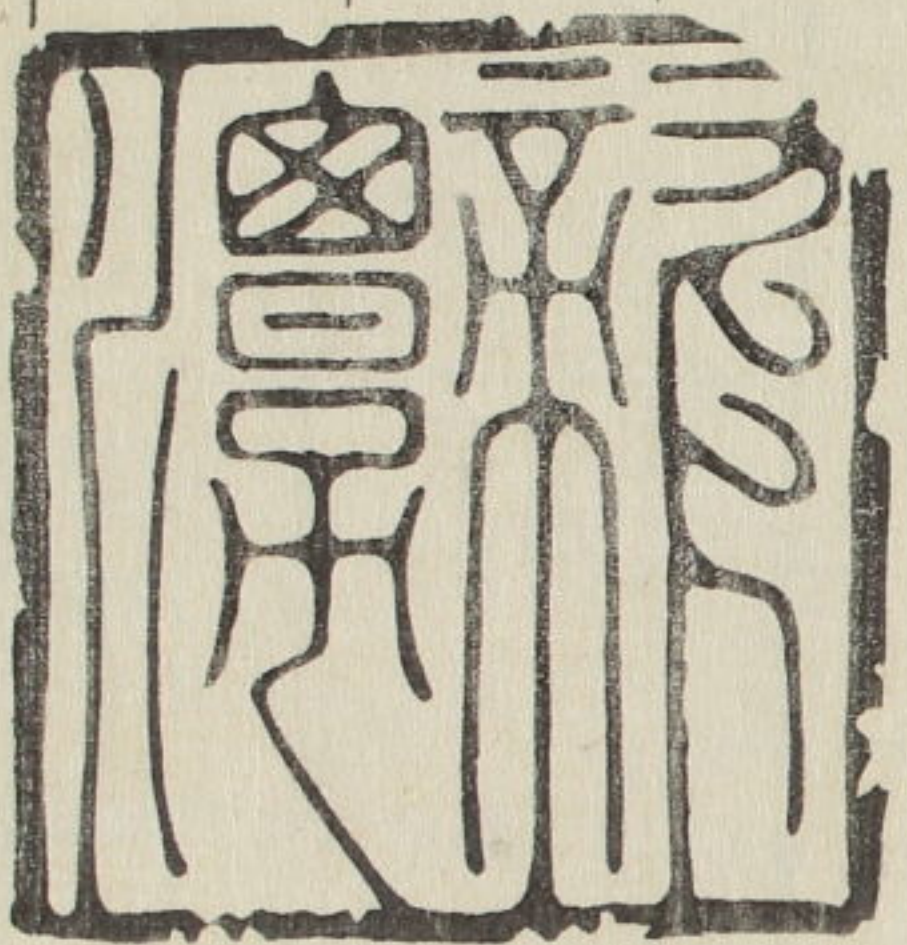
今夫東都之盛。人物之稠。藝
才異能之士。妙技曲藝之
家。矧集如海。誰能端倪極乎。
南都千葉龍卜者。在以插卷
為業。其支行流仕東山。亦受

技于相公之能卜之之曰折柳
之為技也。必順之以活其靈保
之精焉。其至全而後之樂活矣。
其能集造化之巧在也。也或之然。
動輒拳曲訂索。美則美。然而
之。宋京其精離矣。又何異剪

絲矣乎。譬法必會。如錦綉羅縠
之美。而不必有黼黻文章之美。
如五味耳脆之滋。而不必有大
羹玄酒之共。今求于東郊。都
公之技。若畫一卷。名曰活花
記。雖頗俚諷。涉俗。而要人

易解識之。故千葉氏之書
技也。深有味於大羹玄酒矣
哉。偶依詒命而讀之于余。
余嘉其言之之勳焉。述其所
以作書。以弁卷首之尔。
明和之甲申臘月日

朝右大夫祕書監林信生撰



演じし陶渊明の東籬の菊は成て疾風と烈周旋
 叔の蓮と愛して君子には志固めやうあり李唐より世人
 牡丹と花王と賞し莊子の愛は蝶とありて百年の
 花は皆自然の意の極なりや我日本よりしてハ
 うをすく毛がふは神代の昔より花苑と讃くハ
 本花園那媛の早あり居と名表と書感き
 浮城ふは神といふ公は法乃奈の又管の縁
 梅は筑紫(花)で神と慰めとく神院神詠を

花の事河にも流る王仁の菟波津の天と梅
 ありて海聖武天皇の三笠山乃八重橋のめぐをまひ
 奈良の京(朝)くくづのふけ阿(の)り普くは海あり
 世は橋と登て日乃花のふけありと地下に
 ありては人々花のふけも春は花のふけ
 幕は花のふけを代の敷切なりや紀伊
 花のふけは發其花詞林と書ありて
 春を花のふけは花のふけは花のふけ

乃よりぬ白浪乃心もやうく花道の嫉優艶の
 うらみも花嫁花婿の名何れも花怒愛樂よも
 んの心と心も代々の撰集物語よも著明を今より
 妻よりよせつる花婿の源氏小花の真女は是れを
 少きと等と家にいしよま何れも花道ハ性昔も
 ありと心も法もあく式もあく只五人ありては乃
 友を眺めりむりなりそ後

室町將軍源義政公

河代泰平乃河より花道

かん法式を改申よ色む書院中一乃松として康正
 年中源氏の花海と極めり而後文明乃以東山
 の東求堂(河)流せ給ひ河羅髪ありて

慈照院喜山道慶と法改名 世は是と稱して 能河流

お河流おと石具一茶書ふとて 世は是と稱して 能河流

花をけ何れも用ひのひぬ千家流石列流を列流

とよも皆會席乃むらと出たり今世より茶書

抛入是あり各花道ハ子家ハ傳來るも花道ハ

活花記 上之巻

五

い知る人希あり茶乃乃古流もそかく

松山相公の

活秘蔵の活字の然也珠光より傳来して幻語の法

流として今に南越古門たつが家も残るをうりにして流布

せぶきバ知る人少一 生花も古来寺院敷寄本化法もあり申し妙なり 井とた膳より一人けあるに去一息と傳へたり

茶道并に紹臨利休をそくく せりしりけりしりけりしり 石列家を別家より

弘もも志席茶室乃よま添に九牛が一毛あり

書院の法式よかきとど抛入と極くむと活のむと書

として寂寥として綴より死活と毎人に愛わや師の人

多一故よ世の人立花に法式わけて活花の法をそく

式ありとむもつと活字の立花より古記事をそく

かどう作法よりそくんや法式をそくバ礼の書院を

立常乃禮とそく一ゆる席をねと活花と唱てむと

賞一田花田系見切尺強一縁乃切をそくふとひとそく

む乃尺中より真行草の礼のそく花器ふとまゆの

器わりお位も位乃む形とゆ一むと活字く花清く

清にあり核としてそく容姿も成一勿論子書万

飛乃壽あり阿は女執男流の對乃さるむも松竹梅
 のいけり秘説多く去流乃むよ八歳うさう小傳有る船の
 さるよ八出舟入船泊舟まの七執又良の風流七夕のさる
 その口傳多し源氏乃む八別傳ありて桐壺帯本と婚め
 又十四執乃活方貴人(身執花もま印可免許よむ
 て刻久し一之花も生さるも之回根ありとさるも之花を
 巧と貴し一而真に如く活むかかうきしと捨る
 瓢と指ひ清水と汲く野童の荷持るるさ種といふ

七飛生茶はゆさまうさる山に池水あり深谷よ大木あり
 右記井乃蒸にくま中乃あのみまを分て流れ松
 のさる根小溜れ流あり且の釣執ようむ蔓あり凡子
 夏万花根茎枝條葉花菓乃七まいはまをぬいつれと
 持んやその海情とんく樂まんよ一本一草もむあり
 ず只親乃子とむとふ等し一之花はむとあてれと唱へ
 生花ハ氣といきると唱小之花よ八真小心見越添受流
 茶壺ホの七乃乃具と調(と版中版下版乃差別あり

花言一上之卷

七

ぬしりぐ位官正しく筋松殿をゆく王樓よまら
 鳥帽子並きよて車宿よ庭をがけしをるこいあま
 とも毎日用ひて普阿の歌よけし生む八昼兼
 ともくび日くは新よして志も能滋とそものあり子竊
 世との活むれしとくるとかき記宝曆七年の春
二月九日 家法橋

勅許好日日子系家代くさむじし晨の赤日
 かれ八昂日落東根園慈照寺し清むゆり

松山相公御同麻の折言る像の靈前(生むと依)
 しくくくくくく

禁裏

二御所様 第一條花園白丸大臣道香公(生花の
花秋八松竹梅 中山次中將

愛親卿の仰よ依て繪所願正五位下
 茶丸系之進藤原朝臣土佐光芳撰て

画堂と奉獻 松竹梅ハ六種の秘事
 花秋八松竹梅とけ出に不載

後經波津よかわくはまろ人集て道と依を以
 柳堂の廊下跪さけ一乃と弘ゆた
 我よ軟く志とくろぶま多く頻よ先師の徳と感ト二
 百余年まきまらるるの立帰まき中興すまき乃阿
 玉るるべしとにほきかく儀沢あのあるらんより流か

で道胎をよびふ人あざむくも忘境に下る
もつら茅釘乃今ハ穂は土舞の藝派よりてわりの
山の雲との咲出るもの救く人あまうれいさるる自
画に寄して身支はゆるさるる刃切見隠しそ奥深
活方景にけり及てけける志のあらん今ハあま
るもの一のふべ我七情をわすれしそ私をなさん
天地よらるる種一として活けざらるるからん其
いさるるあまぬとらるる味深長あて強波の浦のり



わもあまぬ種をきて来て藻塩を書けつめくもいと
かまきんねごととらるるふそ慈と述るこらるる

明治元甲申冬至日

松翁齋法橋

千葉龍卜述



九例 附或同

威人同曰我初阿より祀に始て流流乃傳とすもむと
 敬少り多年あり子家流石列流を列家かより
 も皆中流の事ありと只榮席のむをらありて書
 院の活字法武別と又生堂の立義より物より
 とり人者しゆ之祀乃つ入る傳とすども立むハ
 お腹の作法も並生也の教にあつてはむらも立む
 むとびやとむらうとすゆりて今世生也を立む
 と傳へとりよりとすむを流子家宗源の源氏活也

~~~~~侍授せしはいつるに実又何の侍來也  
事小也子答曰源氏活花しりふりハ性昔

室町將軍源義政公政事乃帳月花しんせし源氏

以康正三年丙子初冬之に列芦浦寺坊文河孫花世集

河孫系珠考坊徳大寺義門大江廣末六人命令して

入十口帖乃花論と極花侍抄とあり源く秘し

室茲又納りひぬ源氏乃是法ハ尤生也の在流あり

入十口帖の活方考源杯の卷六種の畧式活方  
義君別して西秘秀ありて西室茲又収しお世るに

知人希あり中に色珠考坊花道能なる也六種の

秘事乃内お紫の突乃花忌と花論の卷と有能も

下し冷る吏を代く花侍源杯手家し侍室忌と

~~~~~むめとくものありむりいきし侍授のみハ子ハ先祖

行胤初珠考坊の身後此由緒花侍名忌亦有る源氏流生

むと号するなり源氏五十口畧の内忌忌亦く及在

源氏物語 不老のつとみ名物

源氏物語

相國寺有

六条家

無火也

夜の裏紫

東屋

夕暮

同 花 産 栴の盆

冥屋

右の娘

紅紫

相壺 帯本

一条家

子家

清水寺

娘園

茶田家

同

子家

家傳

この卯乃花

源氏全記

初ん乃

一向

十八

台命

有

書に

書に私考

書明曆二年改板江源武鑑と云は全致二十卷有り
十八巻目の後にも云論江所望の日記あり江源武鑑は編六人の連成の内
太田廣末と云ふ江源武鑑編能傳授と云ふ事あり江源武鑑の遺稿
あり江源武鑑の家より一花傳の云ハ大田廣末より傳來されハ江源武鑑
と云ふ江源武鑑の遺稿と云ふ事あり江源武鑑の遺稿と云ふ事あり
倭漢三才圖會にも六角堂頂法寺の事と云書一中に坊舎五坊の内此坊の中
あり江源武鑑の日記あり江源武鑑の日記あり江源武鑑の日記あり
傳授江源武鑑其家系善之累世以專字為名中真有專好者堪能定法式家
小卷物大卷物及秘傳抄撰あり江源武鑑の遺稿ハ康正二年あり立花武傳抄ハ
天文五年あり江源武鑑の遺稿あり江源武鑑の遺稿あり江源武鑑の遺稿あり
江源武鑑の遺稿あり江源武鑑の遺稿あり江源武鑑の遺稿あり

凡例或同終

源氏活花記と

書院向會席ホの活方
心得花卷の事

於て花と見らるるハ真行草の體あり書院小座補ホ此差別
もありその心持もあつた是乃側を中と見る事ハ
非礼なり亭主方ハハ餐應の意あり是を心持ありて
足少かたべー見中へ挨拶して是に心持のありと云
その席にて是れをその心持が能く是れを是れ入るる事あり
庭亭主の方よりハ此意のなる事ハ所作の意活あり
あは習ありてハ活なる事あり先此といふと思はれ
花乃出生と見分て活なる肝要あり万本子字も是れ生

して吐候ものも道を紫衣むらさきを少くもか出生いっしやうあつたまふ
 じり候初るもあまじも又換かへあふ花はなごらんを
 一入いちにゅうはながと一入いちにゅうの中なかにた満まん定じやうと働はたら有あべ一いちは家けをた
 表うら裏うらも有あべ一いち出生いっしやうと知しくれを花はな汁じゆ多たて紫むらさか一いち故こにむ
 祇ぎ園えん式しきの始はじは六むいふよて出生いっしやうと取とりしにんにんと付つてるこ
 余あまの風ふう情じやうと付つてあめゆぐあての風ふう情じやうあまじも死しむふら
 るのありそ信しんよてハ藝げい様やうあつて見みにく一いち様やうと去さいよま
 清きよくふ出生いっしやうと背せいぬらそむあらんぬわな絨じやう乃の花はな並なみあ
 か出生いっしやうあふ余あまの曲まがりゆる病やまいあり速すみに秘ひめをのハ

じり候はなは死しにあり長なが寝ねもあつ風ふう情じやうも背せいしを活くわむ也や
 じり候はなは死しにあり中なか乃のと能たりて活くわむ也や
 ましよて花はな飛とぶるはなづりづりて活くわむ也や
 じり候はなは死しにあり道みちも舟ふね知しらんやそ又また考かうとむは紫むらさか一いち故こにむ
 出生いっしやうと背せいぬらして一いち瓶びん乃の内うちよ去さ秋あきを極ごくあらん凡たゞ瓶びんふも活くわむ
 りハ性しやう昔せき欽きん明めい天てん皇わうの御ご宇う異い也や一いち瓶びんと信しん一いちため一いち物もの
 花はな瓶びんと二に瓶びんと一いちも世よ留とどめりむるハ性しやう昔せきの酒しゆ意いりやふ
 るの字じと去さ今いま世よとよ用もちるむ去さハ結むす臨りん利り休しゆの来き榮えいの宗そう函わんの
 好このむ不ふり種くさの花はなを出来できるあり右みぎのむるハ世よ小せう希き也や

此の言も好むは、
 実風なるも、
 背てハ、
 のゆゑ、
 人の事、
 あらむ、
 のか、



是とん、
 と知、
 ん、
 を、
 毎、
 不、
 山、
 と、
 法、

月光一輪のごとく万有の出生の理ハあり、量量も知
 於天地人の三才大極と陰陽五行の配當して、西と
 あり、又理学として理屈は、落く必業に、うと此のあり
 たし、又醫師の学カ、けても、療治不功者、るるも、有る
 或ハ、清々分り、けて、天とあり、偏ハ、地とあり、く、白と、色ハ
 と、赤と、下と、して、氣と、下と、して、木と、火と、土と、金と、水と、
 西ハ、候と、西と、出生と、なる、人、も、あり、阿、の、を、陽
 よ、つ、の、阿、の、あり、る、を、陰、に、き、ひ、又、あり、る、を、
 東方ハ、引、張、せ、り、き、る、是、皆、偏、屈、ある、る、當、り、る、地、の、る

よ、生、る、有、情、非、情、も、に、陰、陽、の、氣、を、稟、て、生、る、を、の、を、
 一、系、乃、中、に、も、自、然、と、陰、陽、の、を、出、生、と、肯、ど、き、る、
 を、量、量、の、あり、て、風、流、を、く、ん、む、寸、法、と、極、く、る、
 と、下、の、差、別、有、り、と、り、る、も、あり、或、の、毫、毫、の、尺、は、一、寸、
 法、を、極、致、と、り、る、も、受、も、活、む、ハ、所、執、を、一、只、花、小、り、を、
 毫、に、り、麻、乃、極、好、よ、き、る、ぐ、ひ、む、も、毫、毫、も、お、後、入、三、圓、記
 る、ハ、作者、の、心、の、働、き、る、べ、一、紙、心、を、く、く、後、藉、よ、き、る、
 よ、ハ、あ、く、は、ま、ら、大、概、を、一、一、け、は、二、二、け、は、三、三、け、は、
 む、に、り、終、り、予、史、車、形、
 帝、月、形、と、り、る、を、
 一、八

納戸一海を走らばもさ乃灯は遊一用ひたるあり故は寸法に
 傳わりむの活方にも習わり折灯の形不寸法をいふと
 てもけを美と云ふべしなむの活方からて一仍てを飛
 雲乃折灯は去流は折るのありは居る小舟を舟の柱は
 そのあり船のむきは阿高時刻と限いせるものありと
 是よりわくを理と云ふとる小舟のまの末より其秋の
 初めて用也一日のうちに阿別あり物をも書きて出舟
 写ちてハツて入舟せり泊舟とんけいせるが習ありと云
 へり余り偏座ある者なり是もを美と云ふは一向に

舟のむきは海川に船はたるとるものふせを四季に分ち
 阿別を分ちあり東南北風は吹ひ往來するものなり
 洋風を走らば船はても登いとも泊舟とる出入もそかく
 舟のまのまのありにり出舟入船泊舟を舟の船も有
 何れも生か習あり余り理居るに却て風雅の舟小
 うと舟のむきも換好より重量なる船と用也物流も
 細線連も物好は舟あり物流入舟と又換好なるは是も
 重量ある船あり物流もふありと物物執守法ありそ
 何れも好に奇るべし環も物流も好は牙撥桐繩折紐も

頼もしく物やうと下の別あり重の物籠組やうとさまぐ有
 一の物籠組もくも作はくも物尤物やう有並物籠も並
 活やう習あり字で知る一物一舟は浪く活方活
 況義武法表巻切紙傳あり後日箇条と地一並あり皆委
 東山 源君の規矩と糸一結するも中絶一たれバ
 知る人もる一承終よむといき活意は古法規矩も承終
 ありとさるる人の多さハ尤あり道流の業ハむと活ハ
 今く殿はあはれ無藝なるもバムは物籠をく是非とい
 ど自賛毀化と大いす一めめあり必我言と存一と

後世にも業惑する物人の名に在実の一巻と初は
 書院向小左衛門の花系は木に在終すが終は自画
 と吸く花形と書一初字の一助ともありんと世は
 及がことそのなり

源氏物語備六帖抄秘

○ 笈木

○ 紅葉笑

○ 須磨

○ 明石

○ 平之保

○ 東屋

表之巻箇条

○ 花敷紫負の事

○ 墨汁系汁の事

○ 十文字刃切の事

○ 長鏡の事

○ 又切并同色の事

○ 白紫添副がねの事

○ 菖蒲杜若の紫巻の事

○ 向枝壁枝白の事

○ 角に毛差耳の事

○ 卓下じき乃事 香煙付

○ 雲蒸水打の事

○ 落板露系れり

○ 菓物類の事

○ 廻り墨の事

○ 容れ生い茂れを陰陽の事

○ 衣入仕具類の事

- あり生並海宅の事
- 生海の花納の事
- 生絵に墨の絵木の事
- あり位主位の事
- ねまふ婿ふ墨の事
- 花切町の事
- 萱草一八の事
- 佛茶の花の事
- 追善茶中陰の事
- 同賞歌の事
- おおむ尺振作法の事
- 男女赤白の事
- 入道句の事
- 産後へ不出の事
- 室喉茶切振の事
- 神茶の事
- 後造の事
- 花とむ入の縁の事

- 二重切よてありむ不中
- 出陈宛海茶旗立帰むの事
- 舟入船泊舟の事
- 花む墨の事
- 扇板炭板の事
- 有花茶人おの事
- 有竹茶の事
- 産後へ奇生振の事
- 二重切生振の事
- 一重切茶墨の事
- 灼む墨の事
- 須寸法の事
- 細口茶の事
- 茶烟む入汗の事
- 有茶灯の事
- 然也壁換の事
- 産の挿振の事
- 二重切活振の事

○八重切いもやうの事

以と

右八十四箇条一年やぐ物有るが月々四季の事出生を
くもお分執人の人々よいたく条一事として傳授せ
しむるあり

○茶席に生花の事

切紙傳授箇条

○大葉を毎月の別但六葉

○一花一葉の事

○菊一輪の事

○杜の葉乃源沃の事

○毎月の葉の事

○名月乃木の事

○紫舟の事

○並船の事

○大紫四季の事つるいり

○秋海棠の事

○杜若四季の事つるいり

○あ仙の事

○七夕の事

○乞舟の事

○破損舟の事

○二艘並舟の事

- 二艘約舟の事 但し船の船と
- 湊入船の事
- 櫓の事
- 松の事
- 紫の事
- 貴人より洋飲の事
- 婚礼式對の事 但し高板
- 婚礼盆の事 留屯の事
- 袴忌具足忌用初の事
- 二艘約舟 但し船の船と
- 一種もの事
- 紫の事
- 竹の事
- 蕪菜の事
- 婚礼式の事
- 婚礼去院室活方の事
- 女新男籠の事 忌の事
- 忌乃七籠飾の事

- 二幅對の事
- 八幅對の事
- 箒の事
- 撥板の事
- 蓮の事
- 糸の事
- 地下の人夫おさす事
- 兼乞乃忌事
- 二幅對の事
- 四幅對の事
- 忌席松の事
- 巾の事
- 忌の事
- 提の事
- 糸の事
- 大御宗匠將系束の事
- 二紫一忌の事

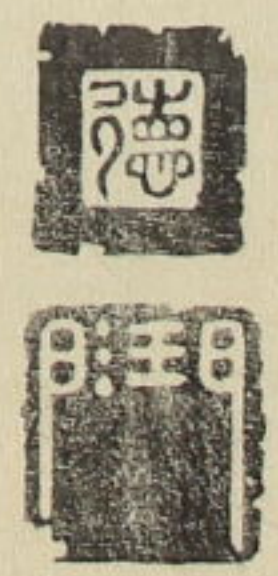
○ 花鏡を結ぶの事

○ 切込む苗を串の事

収と

右切紙入十口管糸ハハ煉源志と凡在切紙と収と
只授せしむ表入十口ヶ糸切紙入十口ヶ糸之海
と源氏入十口ヶ糸有り却合百六拾二箇糸也

書寫 門人 大橋新藏



源氏活花記之終

